



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〔第三二一号〕

穀雨

四月十九日

ものの芽

今年は桜の季節も早々に終わり、二十四節気は「穀雨」となりました。

春雨が降って、百穀を潤すという意味があります。

自粛ムードの中、自宅にすることが増えた方、多いのではないのでしょうか。私も庭の草花や、時折やってくる鳥などをいつもより目にするようになりました。そんな折、明治時代の俳人、正岡子規の短歌に目が止まりました。

くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の

針やはらかに春雨のふる

二尺ですから、六十センチほどに育った薔薇に萌えたまだ柔らかい棘、そこに春雨が降っているという景色を詠んだもの。子規は病床に伏しながらも、俳句の文学性を高める活動に尽力しましたが、俳句に続いて短歌の革新にも取り組んでいました。この短歌は、亡くなる二年半前の明治三十三年の作品で、「庭前即景」と題がつけられています。病床から見える庭の景を歌にしているのです。

短歌に詠まれている薔薇の棘、触れば痛いのではないかと思いましたが、春の薔薇は冬に選定した枝から新しい枝が伸びて、そこに小さな棘がついています。触ってみると、柔らかくて弾力性があり、痛くないのです。薔薇の棘は固く、やっかいなものと思っていましたから、驚きました。

春の季語に「ものの芽」があります。特定の木や草の芽ではなく、木の芽も草の芽もひっくるめて春になって芽吹き萌え出るいろいろな芽をいいます。この時期、ものの芽を楽しみたいものです。

文 千種清美